

令和 8 年 7 月 12 日(日)付

県立大(松江)入学のブラジル人女性2人

励まし合い 保育士目指す



保育士になる夢をかなえるために勉強に励む
イザベラ・マルチンス・マガタさん(左)と
ライス西川さん(右)は松江県立大7丁目、島根
県立大松江キャンパス

多文化共生の 担い手へ一歩

島根県立大の短期大学部保育学科に今春、出雲市に住むブラジル人の女性2人が入学した。知り合った小学生の時から、励まし合って言葉や習慣の壁を乗り越え、大学合格を果たした。子ども時代の体験を生かし、外国人の子どもが安心して地域で暮らせる多文化共生を担うべく、保育士の資格取得を目指している。

(増田枝里子)

2人は、日本で日系ブラジル人の父、ブラジル人の母の間に生まれ、小学5年生で出雲市へ来たライス西川さん(19)と、ブラジル出身で、両親の仕事の関係で小学4年生の時に同市に移り住んだイザベラ・マルチンス・マガタさん(18)。小学校からの同級生だ。

保育士が求められる

マガタさんは来日時に言葉に苦労し、泣いて過ごした経験から「ブラジルと日本の子どもの交流に関わりたい」と望み、保育士になることを将来の目標にした。西川さんも「大好きな子どもと関わる仕事がしたい」と同じ夢を持ち、互いに鍛錬して島根県立大出雲高校から、同大の推薦入試に見事受かった。

短大部がある同大松江キャンパス(松江市浜乃木7丁目)で、外国籍の学生が入ったのは、20年ぶり。現

保育学科の門をたたいた2人は、教科書にある難解な専門用語も予習で綿密に調べて授業に臨む。西川さんは読み聞かせの授業で地域の幼稚園を訪問したのが印象深いといい、子どもの発達心理学に興味があるというマガタさんは、「赤ちゃんについて学ぶのが楽しい」と話す。新しい友人もできるなどキャンパスライフを楽しみながら、将来は、古里になった出雲市が目指す多文化共生の担い手になるようと研ぎを積む。

島根県立大・山下さん

フルコンタクト空手 全国大会連覇狙う

愛媛出身 自分と向き合い技磨く



フルコンタクト空手の組手で全日本空手道選手権大会の連覇を狙う島根県立大の学生がいる。松江キャンパスにある人間文化学部4年の山下桃代さん(21)。出身地の愛媛県を離れて学生生活を始めてから、師がそばにいない環境で自分と向き合ってきた。磨いた技で集大成の場へ臨む。

勝利する。山下さんは愛媛県西予市出身で、4歳上の兄を見て小学1年で道場入門。中学、高校では他の部活動と掛け持ちしながら空手を続け、大学では1、3年時に全日本選手権で優勝した。輝かしい成績の裏に苦勞と発見があった。大学進学を機に、一から空手を続けられる環境づくりに取り組んだ。学内のトレーニング施設や、大学近くの松江総合運動公園で体を動かす中で上達方法を模索。空手サークルを立ち上げ、友人の協力も得て環境を整えた。

高校時代までのように、そばにいた師範に助言してもらえない環境ではない中、考える力が原動力に。稽古

大会に向けて練習を重ねる山下桃代さん―松江市浜乃木7丁目、島根県立大松江キャンパス

一つ一つの意味を探り、実際の試合を想定して質を高めた。体力低下を防ぐのが目的だと思っていたロードワークも息が上がった時、試合で疲労した状態に似ていると気付き、実戦とのつながりを意識できた。

8月にある全日本選手権には軽量級で出場。「必ず取りたい」と決意する。優勝すれば、極真会館中村道場が主管する全世界選手権出場の可能性があり、小学生の時に夢見た世界チャンピオンに近づく。支えてく

れた故郷の両親や師範に向けて「結果で何か貢献できたらいい」と意気込む。(岸本久留人)

STAGE

私の現在地

フルコンタクト空手

山下 桃代 (21)

防具を着けずに闘うフルコンタクト空手で、実力日本一を誇る島根県立大入間文化学部の山下桃代(21)。出身地の愛媛県西予市で小学1年から腕を磨いてきたが、大学進学で移った松江市では師範も稽古仲間も身近にいない。自分と向き合い、知恵を絞って練習の質を高めてきた。大学4年を迎え、連覇の懸かる8月の全日本空手道選手権大会は集大成の前へ。前へ。身の上とする不屈の精神で道を開く。

(政経部・岸本久彌人)



太字内の体育館で技を磨く山下桃代。松江市西乃木7丁目、島根県立大松江キャンパス

2025年8月、大阪・舞洲アリーナであった全日本選手権。表彰台の一番高い場所から大きなトロフィーを掲げる山下の笑顔がはじけた。大学1年以降、2年ぶりの優勝だった。

一般女子軽量級(53kg以下)の決勝戦。試合開始の合図とともに相手に近づき、左の蹴りで先制の一打を放つ。その後右のローキックを武器に接近戦を止めない。突き、蹴り、突き、相手の反撃で被弾しても、構わず前に出て技を出し続ける。

制限時間の2分、2分間の延長が終わっても決着がつかなかった。再延長に入った。息が上がり動きが鈍る。もう一回、全日本選手権優勝を取り返すんだ。白を鼓舞した。苦しい時にはいつも支えてくれた人たちの顔が浮かぶ。両親、師範、島根にいる地域の人やアル・バート先の人たち。

もう一度キックを入れ、突きや蹴りに力を込める。みるみる点数が増える。主審が笛を鳴らし、山下の判定勝ちを告げた。松江での孤独な日々を乗り越えつづけた末、喜びよりも安堵が勝った。

「これまでやってきた練習が報われた」

兄を追い追場へ

フルコンタクト空手に出会ったのは4歳。親に連れられ4歳上の兄が道場で稽古する姿を見て始め、自身も闘うようになった。愛媛県内や四国の大会などで優勝や上位入賞を重ね

頂点「取り戻す」乗り越えた孤独

全日本 2年ぶりの優勝



新で動機やデジタル記事配信は、画をいいます。

ね頭角を現した。その後も中学でバスケットボール、高校でテニスや陸上競技の部活動を掛け持ちしつつ週5、6日、1日2時間、2時間半、稽古した。この間に前に出て、接近戦を繰り返すフットスタイルが育まれた。距離を取って闘うよりも、得意技の右ローキックを生かした。空手界の流派分岐のありで、所属する団体が大会に出られない時期もあった。新型コロナウイルス禍で大会が中止され、試合から遠ざかった。それでもこの2つと稽古を続けた。

ある日の稽古を終えた時、師範が「堅忍不拔」という言葉をくれた。困難やつらいことがあってもじつと耐え忍び、乗り越えるという意味。この言葉が「一番つらかった」と言ってくれた。調べて意味が分かった。「自分に合っている」と思った。故郷を離れてからも、座右の銘として胸に刻む。

愛媛から松江へ

空手に打ち込みつつ国語教員になるという夢を抱き進学した島根県立大。1年時は故郷愛媛で暮らした「貯金」があったのか、全日本選手権で優勝。そこから苦悩が始まった。

2年時は初戦敗退。精神的な不安定さや稽古不足を痛感した。「一人で取り組んでいても上達に限界があるのではないか。初めて空手をやめよう」と考えが頭をよぎった。(敬称略)

山下桃代 (21)

不安の日々、敗退に「もう限界」

中 たった一人の環境

思わぬ激励

敬称略

山陰中央新報デジタルでは、記事や動画を先行配信しています。

STAGE

私の現在地

「考える力」を育んだ学生生活の空手を振り返る山下桃代（松江市立西木一中、鳥取県立松江市中）



フルコンタクト空手

山下 桃代（21）

全日本空手道選手権大会の優勝から4月が過ぎた。2025年12月、山下桃代（21）は自室で一人、机に向かい、出場した試合の動画をスマートフォンで見ながら、ルーティンにメモした。2回戦で敗退した11月の全日本学生フルコンタクト空手道選手権の闘いを振り返っていた。

「2回戦は特にハンデに頼ってしまっていた」「ひとつと相手を圧倒できる体力を付ける。いつものように、自身の考えをまとめ、リアリシングシート」に記入する。文化として思考を整理し、練習の質を高める材料にする。

心理面、技術面、体力面、生活面の四つの側面から、良かかった点や問題点、対策を書き留める。

出身地・愛媛県西予市を離れ師範が近く、いい環境で、強さを支える原動力になったのは「考える力」だ。リアリシングシートは、もともと高校時代、所属した陸上競技部で教わったメンタルトレーニングの一端で空手に応用した。

▲プラスに捉える

試合が近くなると想定されるマイナス要因を、プラスに捉える。「パワーアップシート」も記入。言葉、動作、イメージを具体的に決める。例えば延長戦突入を想定し、体力的にきつても「わくわく」というプラスの感情を思い浮かべるよう意識付けし、笑顔をつくり「よし、よし、よし」と口にする。そうしてうまくいった試合を想像する。

「練習に深い意味を持てると、意欲が高まる。体力を落とさないためにも、と想っていたロードワークもその一つだ。ふとロードワークで呼吸が苦しい状態は、試合で疲弊した時の感覚に近いと気付いた。息が上がった自分をさらに追い

下 近づく夢 止めない歩み 「考える力」強さ支える原動力に

込むのは、走っていても試合でも同じ。普段の練習と実戦が結び付いた。それぞれの練習が実戦のどこで使えるのかを突き詰める。納得して取り組めるようになった。一師範が身近にいた頃は考えていなかった。日常的にミット打ちをする相手がいなくても、上達に必要な要素を空手以外から見いだした。

▲優勝は好材料

日記の最後に書く言葉がある。夢をつかむを意味する「Catch the dream」。8月9日に兵庫県内である全日本選手権は、大会を主催する極真会館中村道場の全日本選手権の選考基準の一つ。優勝は好材料となり、世界の扉を開く可能性が高まる。

世界で勝てれば故郷の師範に受けた指導の正しさを証明でき、結果を誰よりも喜ぶ両親を笑顔にできる。

「強くなければなるほど人に優しくなれる」という言葉は、空手に限らず多くの格闘家が唱える。山田もそう思う。「空手を始めるというのは単なる強さだけでなく人間力を育てるもの」

空手は殴られる、殴られる痛みには無縁ではない。だからその人の痛みも分かる。いずれ伝えたいのはそんな伝達の魅力と興行。そのために、前へ、前へ。歩みは止めない。

（取材・文）
（取材・文）
（取材・文）



山形市立新巻シタルでは、記事や動画を配信しています。